

できることに着目、機能向上

184

「愛の家グループホーム川越山田」

(埼玉県)

岡由美子

私は、グループホームは介助量の少なく自立度が高い人が、家事や活動を共に行いながら生活する施設だと思っていました。そのため、介助量が多い人は医療的な設備の整った施設や病院に移動した方がよいと考えていました。

当事業所に入居している佐々木たま子さん(仮名)は脳梗塞になり、4カ月入院しました。退院時、右上下肢は弛緩性麻痺(筋肉が緩み力が入らない状態)が残り、寝たきりに近い状態でした。言語障害により「うん」「やだ」という簡単な返答しかできず、意思疎通も難しいと考えていました。しかし佐々木さんと関わる中で「肩に手をまわしてください」と言うと言った肩をかける様子から、話す内容は理解していることが分か

りました。またほかの利用者と家事に取り組んでいると自ら手を延ばし、左手のみで手伝ってくれました。そのような姿から私は「不自由だからできないだろう」「グループホームでの生活は困難だろう」との考えを改め「佐々木さんができることは行ってもらい、できるようにしてもらおう」と考えるようになりました。その後は、発語機会を増やすため



「愛の家グループホーム川越山田」玄関前にて会話を楽しむ佐々木たま子さん(右)と岡由美子さん

頻繁に話しかけ、本人が話す時は、粘り強く聞き取るようにしました。また体を使う機会を増やすため、車椅子に座る時間を増やしていき、花瓶を花瓶に挿す、洗濯物を畳む、食器を拭くなど、できることを一緒に行うようにしました。今では簡単な単語は聞き取れるようになり、ベッドで過ごす時間は減り、日常生活をほかの利用者と同様に送れるようになっていきます。

年齢や障害によりできないことが増えていくとできないことに目を向けがちです。しかし日常生活の中でできることに目を向け、できることを行ってもらえるように援助することで、機能の維持や向上につながります。

「愛の家グループホーム川越山田」では、利用者に合わせて介護を行い、可能性をあきらめません。利用者が日常生活で自分の楽しみを見つけれられるように援助していきます。